

アメリカ人女性が見た明治中期の弘前の原風景

—メアリー クラーク・ニンドの「滞在記」と
ジョージアナ・ボーカスの報告書簡にみる「子守学校」—

保 村 和 良*

A glimpse into the life of two American women in Mid-Meiji Period Hirosaki
— In Journeyings Oft: A Sketch Of The Life And Travels of Mary C.Nind (1897)

By Georgiana Baucus —

Kazuyoshi YASUMURA*

Key words : 明治中期の弘前

メアリー クラーク・ニンド

ジョージアナ・ボーカス

お山参詣

子守学校

In mid-Meiji Period Hirosaki

Mary Clark Nind

Georgiana Baucus

Pilgrimage to the Holy Mountain

Daycare facility in Hirosaki

1. はじめに

明治の中期に弘前に滞在し、当時の弘前の様子を伝記に残したアメリカ人女性の滞在記録から当時の弘前の原風景を再現して見たいと思う。

本論に入る前に、本稿で使用したテキストと著者について大略を述べてみたい。

原本は1897年アメリカのシンシナティにあるCurts & Jennings社から出版された。テキストはKessinger Publishing's Legacy社のリプリント版を使用した。

編集者はジョージアナ・ボーカスで著書の日本語訳は『旅のまにまに—M・Cニンドの人生と旅』である。〔注1〕

メアリー クラーク・ニンド (1825—1905) は1825年にイギリスのエッセックスで生まれ、1850年に渡米し1870年4月4日に「婦人海外宣教協会」が結成されると同時に伝道活動に参加した。1887年には役員に任命され、同協会が日本に設立した女学校と女性宣教師たちの視察として各学校を巡回した。

ジョージアナ・ボーカス (1862—1926) が来日

したのは1890年7月13日で、直ちに函館の遺愛女学校に派遣され、弘前には1891年から95年まで滞在。再来日は1897年8月で、このとき同労者であるディキンソンと共に横浜に出版社「常盤社」を立ち上げた。離日は1923年であった。〔注2〕

後述するが、ボーカスが滞在中に自宅を開放して女兒の教育にあたった当時の「子守学校」の内実については正規の学校教育史には取り上げられていなかった。本稿ではボーカスが本国に書き送った史料の中から当時の「子守学校」の状況を掘り起こしてみることにする。また当時を物語る貴重な史料である「卒業證書」も掲載した。



メアリー クラーク・ニンド



函館 田本写真館
Georgiana Baucus
日本基督教団 弘前教会 蔵

* 東北女子大学

2. テキストの内容と構成

Introductionを入れて全部で334頁にわたる紀行文であるが同行者であるポーカスの場合は滞在者としての視点から細部にわたり、旅行者とは違う面が数多く描写されている。

各章共に直接日本語を聞き取ったものを忠実にローマ字にして、説明を加えているところも興味深い。中には現在では見慣れない単語も随所にててくる。

ニンドが訪れた日本の各地（一部ポーカスも同道している）をあげると次のようになる。

(第3章) 横浜、富士、名古屋、(第4章) 東京、日光、仙台、函館、(第5章) 函館、青森、弘前、(第6章) 弘前、仙台、横浜、名古屋、神戸、長崎、(第7章) 長崎、上海、福州(第8章) 福州、Ming Chang(第9章) 福州、香港、シンガポール、(第10章) シンガポール、ペンナン、ラングーン、(第11章) ビルマ、(第12章) インド、(第13章) ボンベイ、(第14章) セーラム、北インド、ボンベイ、(第15章) ボンベイ、ロンドン
本稿で採り上げるのは第五章、第六章が中心となる。

先行研究として齋藤元子氏の『女性宣教師の日本探訪記』があり、その中で「19世紀後半にアジア、を旅行したアメリカ人女性の記録として、地理学、女性史の研究の対象となるであろう。今日 In Journeying Oft は完全に埋もれた状態にある」と指摘している。

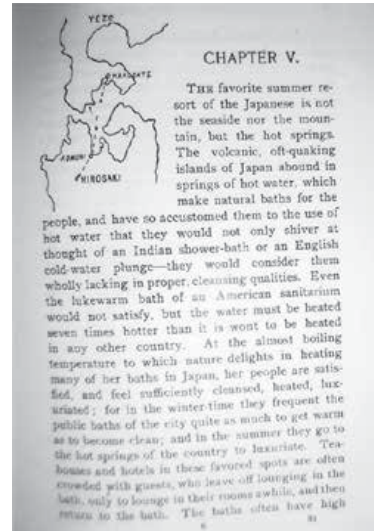
ニンドが訪れたのは1894(明治27)年の6月から10月<2009 齋藤>であった。当時、青森一弘前間は人力車で7時間かかった時代であった。

なお歴史上の出来事として27年7月25日に日清戦争が勃発、12月1日には奥羽線、青森・弘前間に奥羽線が開通し、運賃は片道28銭であった。

それでは函館、青森、弘前に焦点を当て明治中期の津軽の原風景をみてみよう。

3. 函館から弘前へ(第5章、第6章)

温泉と日本人



函館～青森～弘前

“A Sketch Of The Life And Travels Of Mary C. Nind (1897)”

ポーカスはイギリスやアメリカインディアンの入浴とは全く違うことを次のように書いている。

「・・・この(湯ノ川)温泉は人々にとって天然の浴室となります。インディアンのシャワーバスやイギリスの冷たい水に体を浸して震えているとお思いでしょうが、それは全く違います。アメリカの保養所の生温い温泉では日本人は決して満足しないでしょう。実は一日に7回、他のどの国よりもお湯の温度をあげているのです」

そして温泉の効用については「・・・この温泉は体を癒してくれる薬効成分の高い硫黄や他のミネラルをたくさん含んでいます。湯ノ川にはたくさんの温泉宿があり、その数件の中には西洋人にも便利な個室もあります。というのは、男女とも公衆浴場に入るにはためらいがあるからです」

湯ノ川を散策した時の町の情景を次のように書き留めている。

「・・・人力車は料金が高い割には速くないので馬車を使うことにしました。幌馬車に似ていますが、屋根が付いていて乗り合い客は6人座れますが、時には8人から10人になることもありま

す。こうなると、窮屈で座布団が敷いてあるベンチに座ることになります。冬季間や雨季には雪や雨によってできた穴だらけの道を通るので、車輪が穴ほこに嵌ったり、急に動いたりするので乗客たちは手や頭を天井にぶついたり大変な目に遭います」

4. 函館から青森へ

「・・・最初の予定した夜に嵐が来るのがわかり、この状態で海峡を渡るのは無理でした。翌日、意外なことに、ポーカスが以前から欲しがっていた馬を一頭購入することに成功しました。当然の事ながら馬も乗船ができ、出航するときまで待たなければなりません。やがて定刻に出航できる夜が来ました。月影はありませんでしたが、空は晴れ、星が輝き、海は穏やかでした。船の揺れに対しても安全に運航できるように馬は木で固定され、私たちのトランクは船底にいる労働者たちの後ろにロープで固定されていました」

5. 青森

「・・・すべての貨物が積み込まれた「千島丸」は真夜中に乗船客と共に闇夜に消えていきました。翌朝早く私たちの乗った「千島丸」は青森湾に碇を下ろすとまたたく間に大小さまざまな小型の平底船に取り囲まれてしまいました。本船から小型の平底船に乗り換えるために別料金を払いました。船は静かで穏やかな海に停泊しています。まるで、その船は「暗く、穏やかな時間だ」と呟いているようでした。

青森の町の灯りが多くなり、後ろにある山々の暗さに対して明るい感じがしました。手荷物に貼ってあるタグには行き先が書かれており、平屋の旅館に入りました。その旅館は予め、函館で薦められた旅館でした。

塩谷旅館（*英語のつづりは shioiya となっている。青森市浜町）の従業員が外国人客に敬意を払っていることを見せるために小型の船を二艘用意してくれました。それは客用と荷物を積み込むためのものでした。

前日の夜に函館から電報を出したのですがその電報が着くまでに私たちは青森についてしまいました。そのために朝食を食べるのに遅れてしまい、おまけに人力車の手配も遅れてしまったのです。

碎石で舗装された道路を 30 マイル以上もこの堅い座席に座って移動するなんてメアリー（ニンドのこと）にしてみれば、もう逃げ出したくなることでしょう」

6. 道中での出来事

「・・・正午頃、泥で固められた塀と茅葺の茶屋の前で人力車が止まりました。すると、薄汚れた裸の子どもたちと男女数人がはじめて見る「西洋人」を取り囲んでしまいました。その茶屋は平屋建ての客間に相当する座敷 (zashiki) があるだけです。靴を脱いでその座敷に入り座ると、お茶が運ばれて、美味しい昼食をいただきました。

ポーカスは日本語で「(車屋さん、もう、ようございます) "Mr.Jinrikishaman, we are all ready" と車夫に言い、茶屋を出発しました」

道中で弘前と青森間を馬車や冬の馬籠で往復した時のことを思い出して、ポーカスは次のように回顧している。

「・・・ある時、激しい雨のために青森に着くまで 30 マイルの行程にかなり時間がかかりました。また、時には貧弱で快適とは言えない馬車に乗るのに、断わられたり、被い(屋根)の着いていない馬車に揺られたために、数日間は気分が悪い時もありました。真夜中に旅館に辿りついたこともありました。

ようやく、小さな襖で仕切られた部屋に案内され、赤々と燃えた炭火で一杯になった火鉢 (hibachi) が用意され、ずぶぬれになった枕やクッションを乾かすために火鉢の上にかざしたこともありました。

ある冬の吹雪の日に青森に向かう途中ぬかるみに車輪が落ちた時には、親切な地主が自宅の最も広い座敷を宿泊用に提供してくれました。もう一

つ驚いたことは浴室の出入り口に保温の為と目隠しのためにカーテンを設えてくれたことでした。

このような寒く、疲れた旅もやがて良い思い出となることでしょう。やがて機関車が安全で且つ快適に、疲れきった体を運んでくれることでしょう。」

7. 青森から弘前へ向かう

「・・・山道を後にしてようやく弘前から少し手前にある村に入りました。なにやら、前方に人だかりが見えてきました。そうです、ポーカスが電報で知らせておいたために、和徳村の橋の上で大勢の人たちが私たちを歓迎するために待っていてくれたのです。

私たちは急いで人力車から降り女性たちや女学生たちに返礼のお辞儀を返しました。その中にはよき羊飼のような牧師の姿がありました。二人は二列に並んで歩き、薄汚れた身なりをした人たちや黒い家を見てポーカスは気が落ち込みました。彼女は弘前も、せめて仙台のようであればなと思っていたのです。

メアリーは充分歩いたので、人力車に乗せられました。何度も何度もお辞儀を返して和徳村からは人力車から降りて寺町 (Teramachi) (筆者注：元寺町) まで歩きました。お城の敷地の外側にあるこの通りには木の色に塗られた小さな教会が宿屋と白く塗られた真新しい写真館の間に立っていました。

やがて、二人の乗った人力車は塩分町 (Shiwowaiki Machi) に入り、そこで人力車は止まりました。

黒塗りの高い門が開かれて、中から二人の下男が「Taisomate-orimashita」「ずうっとお待ち申しておりました」と笑顔で迎えてくれました。玄関でメアリーはポーカスの仕草を見習ってから靴を脱ぎスリッパに履き替えました。部屋に通されるとそこはまるで箱のような部屋でした。よく見ると、障子と襖が部屋の端に収められていたので部屋からは庭の全景が一度に見渡せることができました。美しい色をしたキンレンカ (ナスタチューム) がふくよかな香りを放ち鮮やかに咲きほこっ

ていました。

メアリーはこの六畳間の畳の部屋で温かい夕食を食べ、十畳間の部屋で休み心から満足したようでした。この明るい日本式の家に住むことで、大変な思いをして函館を後にしたことを忘れてしまいました。ポーカスは「さあ二階の私の部屋を見てもらいたいわ」とメアリーを急き立てました。急な階段を上がると押入れがあり、天井に頭をぶつけることはありませんでしたが純日本式の部屋です。一階にはガラス付きの障子と西洋式のドアが二箇所についています。最初は平屋であったのですが、後で二階を建て増しをしたのです。外を見るとなるほど、通りに並んである家並はほとんどが平屋です。ですから、近所では二階のある家として知られています。(筆者注：原文では *naikai no uchi* と書かれており、その説明文として *house with an upstairs* とある)

雨戸が戸袋に収められ、内側の障子を開けると、北側には昔、大名の本拠地である「お城」が見えました。今は、人々は心の中に秘めていますが、昔、家臣たちは大名には死ぬまで仕えたのでした。ポーカスは「いつか、一緒にお城へ行きましょう」弘前では一番心が休まるし、素晴らしい所だと言いました」

8. 「お城」の様子

「・・・風変わりな門を通り抜けると、そこは全くの別世界でした。喧騒から離れ、周囲に気兼ねすることもなく、戸惑いや、奥地における生活の苦勞から隔離された世界に浸ることがここでは本当に実感できます。広大な土地を踏みしめ、太い松の並木道を歩きながら、堀の水面を眺め、静寂の中で安らぎに満ち、癒されたひとときでした。

頑丈な櫓を支えて、時の流れを証明している錆付いた「かんぬき」や「ちょうつがい」を荒れ果てた橋の上からいつまでも見ているのが好きでした。草の生い茂った古井戸や放置された花壇をみれば誰でも過去の栄光をもっと知りたくなると思います。

そこで、今まで「お城」のことを敢えて話すこ

とを避けていた古参の老人に聞いてみることにしました。

ちょうど、地平線に暖かい日の光が山々に当たり、夕映えに染まりかけていました。西に目を向けると堂々たる杉の木立が整然と並び、道は寺院の方へ続いていました。すばらしい光の影は西に目を向けるとよくわかります。

田の面に揺れ動く穂波の上には、王冠のように雲を抱き、時には星の輝きと見える第二の「富士山」と呼ばれる「岩木山」がそびえ立っています」

9. 私の二階から眺めた藩主の町 — 弘前

次に紹介するのは“*Heathen Woman's Friend*”にボーカスが日本からの報告として掲載されたものである。〔注3〕

「・・・唯一通りに面した私の家の二階にはとても満足しております。というのは素晴らしい弘前の町と田舎の眺めを両方眺められるからです。ぜひ、読者の皆さんには少しだけでもいいので私と一緒に眺めていただきたいと思います。

床まである障子の窓を全部開け放して四方の景色を見てみましょう。南東に向かって、見渡すと屋根の上に石が置かれた低い家々が見えます。その後ろには起伏に富んだ山々の尾根が広がっています。夕日が沈む時刻になるとその輝きに照らされた薄い霞の中に山々が浮かび上がるのです。

今度は南の方角に目を向けてみましょう。高く、堂々と聳え立った杉の木々の列に隠れて、お寺が近くにあり、その右側には第二の「フジヤマ」と呼ばれている岩木山が見えます。周囲の平らな田園地帯から緩やかで、なおも威風堂々とした「岩木山」が雲の下に山頂が雪に抱かれた姿を隠すようにそびえ立っています。

さて、北の方角はどうでしょう。松の木々の優美さと、人を招き入れるような木々の姿は見事なものです。さらに、そこを進んでいくと、木々の間には風変わりな門が見えてきます。かつて津軽のお殿様が駕籠に乗り、家来たちを従えてここを通ったのです。当時の門や塔は、今でもそのまま残っています。しかし、お城は取り壊されています。

すが、その跡地からは素晴らしい「岩木山」の姿を見ることがで、岩木川が山の裾野に沿って緩やかに流れています。

磐石な基礎を固めた弘前藩は防備を強化し、家臣たちは津軽の領地を平定しました。

以上が昔の弘前でした。昔と言いましたが、実はいまでも、その名残があるのです。お城が減び、一族はすべてなくなり、没落した家臣の家以外はなにも残っていませんが、君主の町は健全です。人々は殿様が毎月薪炭や米俵を与えてくれた当時を懐かしく思っています。藩主に対する揺るがない忠誠心は絶対的なものでした、つまり妻子に対する愛よりもはるかに強い絆で結ばれていました。

いまや、日本は新しく生まれ変わり、もはや、古い日本ではありませんが、人々は旧藩主のことを想い、没落したことを嘆くのです。彼らは藩主との隷属関係ではありませんが、どの殿様よりも統制力があり、民衆を導いてくれたと信じているのです。

よく「その国を見ればその国の力がわかる」と言われますが、藩主は自分たちの先祖に畏敬の念を持ち、祈るように教えました。死ねばみな灰になるのですが、彼は各家に仏壇を祭らせ、死者を弔うために位牌に名前を刻み記憶に留めおくのです。仏前には極簡単な料理が供えられます。このように、民衆はいつの間にか藩主の手中に置かれ、逃れられない関係にならざるをえないのです・・・」(以下略)

10. 二つの学校訪問

「・・・この学校の校舎は地元のある篤志家によって設立されたものです。ペンキが塗られていませんでしたので弘前に赴任したばかりの新任の若い先生たちからは *Natural Wood School* (自然木で建てられた学校) と呼ばれていました。女生たちの様子はこうです。よそ行きの一番良い、明るい服装をして、艶のある髪には派手な色のヘアピンでまとめられています。メアリーの挨拶の後に歓迎の演説や歌が続いて行われました。

メアリーは女性徒たちが前かがみになって退屈そうになっていることに気がついたので bean-bag board〔注4〕を使った競技の話をするようになりました。もちろん、彼女のお話は通訳を通してなされました。

ボーカスは日本語で行いました。その内容は戦地で戦っている同郷の兵士の勇気ある行動のことを上手く話すことができました。彼女はほとんどの日本人が勇気ある兵士を誇りに思っていたから、採り上げたのでした。それは白神源次郎〔注5〕という兵士が戦地で致命的な傷を負い、死に至るまでラッパを手放すことなく、最後まで「進め！」の合図を高らかに鳴らしたのです。ところが、話の中でボーカスは「ラッパ」と「カップ」を間違えて言ってしまったのです。西洋人の大胆な笑いを誘う日本語の間違いにも、日本人は礼儀正しく、動揺することもなく聞いていましたが聴衆はとうとうおさえることができなくなり、爆笑の渦につつまれましたが、彼女はすぐに落ち着きを取戻しました」

11. ある男子校からの講演の依頼を受けたメアリーとボーカス

「・・・講演のある日は雨が降っていましたが、幌で覆われた人力車に乗ってその学校に着きました。学校の入口で数人の先生たちに出迎えられ、厳粛な雰囲気の中を私たちは講堂を通過して、日本のどの学校にも見られる典型的な二階の部屋に通されました。

たぶんこの学校は生徒の数に見合う適切な教室が不足しているのではと思いました。名古屋の女学校のように教室は狭く、窮屈なのでしょう。それはこの学校の職員室についても同じことがいえます。

前に訪問した女学校の場合は一つの教室を二つに分けて、仕切られた状態にしています。その仕切られた場所を使って先生たちが空き時間をそこで過ごせるようにしています。また、その部屋には書籍や書類を置いたり、保管したりしています。そのほかの使い方としては、会議やお客用に応接

室にもなります。

この男子校の場合は完全に職員室は分かれています。メアリーとボーカスが案内された部屋のまん中にはテーブルに白い布が掛けられ、食堂のようでした。二人はそのテーブルの近くに置かれた背もたれが直角な椅子に座らされました。日本式のゆったりした作法でお茶とお菓子が運ばれてきました。

三十分ほど休息してから一階にある集会場に案内されました。そこには約300人の生徒たちが集められていて、明らかに長時間待たされていたことがわかりました。この日のためにメアリーが用意した演題は「時間を守る」というまさに演題と生徒が待たされていたことが奇しくも一致したわけです。その演題は「偉大な人物は時間を守る」でした」

12. 「お山参詣」に出会う

「・・・弘前から5マイルほど離れたところに藤崎という村があります。集会の行われた場所の隣には公立の小学校あり、小学生たちは放課後に校庭や道端でボール遊びをしていました。

ちょうど「お山参詣」が帰る途中で、それらの喧騒と子供たちの遊び声が混ざり合って街道は大賑わいでした。

この巡礼 (pilgrims) に参加する人たちは毎年行われる「霊山」への準備をするために何日も前から忙しい毎日を送るのです。その準備とはまず、「みそぎ」と「断食」を数回にわたり行い、難行・苦行の旅路のために必要とされる物品をそろえるのです。飾り気のないシンプルな白無垢の「半てん」を着て、足には (waraji) — (coarse straw sandal) 草鞋を履き、高くそびえたった竹の棒には紙で作られた「吹流し」や多くの場合は材木を薄く、削った美しい「かんな屑」を飾りにつけた棒を男たちは空高く持ち上げて行進するのです。

彼らは隊列を組み、行進しながら次のように唱和するのです。それは、こうです。

"Saigi, saigi, doko saigi,

ii itsumi [sic] , nano kai [sic]

nano kin myocho rai"

「サイギ、サイギ ドッコイ サイギ
イイツミ、ナノカイ [ママ]
ナノ キン ミヨウ チョウ ライ」

〔注6〕

(筆者注:この歌の説明をメアリーは「悔い改め」の歌と記している)

「・・・私たちは二三日後に「お山参詣」の一行が山から下りてきたところを見る事ができました。祈願のための吹流しや、願掛けの垂れ幕、紙で作られた御幣など、それらはすべてが岩木山の頂上に奉納されたものでした。この巡礼に参加して彼らの「悔い改め」は成就されたのでした。今は喜びをもって飛びはね、手にした団扇で「うねり」を表し、踊っていました。

彼らはの描いた絵は奇妙で怪奇的なものでしたが、人目を引くような絵でした。

市内の学校は休みとなり、女学校でもそれに倣わなければならなくなりました。メアリーとボークスもその奇妙な踊りの虜になってしまいしばしばベランダに出て見物しました」

以上のように津軽の伝統文化の一つである「お山参詣」の様子が二人に深く印象つけられた様子が描かれている。

メアリーニンドにとっては約4ヶ月の滞在を過ごした後、浪岡、青森を経由して、次の訪問地である仙台に向かうことになる。

13. 当時の弘前の風景写真について

本書には当時の弘前の様子を知る上で貴重な写真が4枚掲載されている。

ニンドやボークスが滞在した頃には日本の写真技術も向上し、鮮明な写真となって残されている。

「・・・明治二十年ごろは日本の写真技術も湿

板から乾板の時代に移行した時代でもあり急速に写真が普及し、多くの写真館ができた」〔注7〕

2人は弘前にはいり和徳と東長町に向かう境にある朝陽橋を渡り元寺町を通過した時の記録として教会の隣に photograph gallery のことを書いている。これが当時、明治24年に開業した神忍写真館であり、田井、矢川に続く第三番目の写真館であった。〔注8〕



写真1 STREET IN HIROSAKI (弘前の通り)
Showing "house with an upstairs"

ボークスが述べているように、「二階のある家」として弘前の通りを紹介している。塩分町付近と思われる。現在では(しおわかまち)と呼ばれているが、歴史をさかのぼれば、このあたりは屋号のある商家や、南側には「しわく町・うら町」として武家屋敷があった。この塩分町はちょうど「お城」の南側に位置して、元大工町から新町(あらまち)の坂に至る東西の道筋の町並にあたる。〔注9〕



写真2 "THE O-SHIRO" At HIROSAKI (お城)

この写真の撮影位置は大手門から入り下乗橋に向かう手前左側の一角から撮影していることがわかる。

今回、場所の特定を確認するために調査したところ、全く同じ位置から撮った写真があった。〔注10〕



写真3 "IWAKI SAN" (岩木山)

この写真は現駒越から向駒越に向かって岩木山を望む場所から撮影したもの。橋の下には屋形船らしきものが見える。

14. ボーカスと「子守学校」

最後にボーカスの救済事業の一つである「子守学校」を紹介しておきたい。弘前に滞在中に彼女の心を痛めたことがあった。それは年端も行かない女兒たちが学校へ行くことができずに背中に赤ん坊を背負っている多くの女兒たちの姿であった。

ボーカスは次のような内容の報告を本国に書き送っている。

「・・・子守の女の子たちは毎日自分よりも小さな体重を体に背負い、その体の「ぬくもり」と自分の着ている着物で暖をとらなければならないのです。この女の子達は外に出て背中の赤ん坊を世話をするために学校へ行くことは禁止されており、子守をすることがこの子たちにとっての「教育」なのです。

私は何とかしてこの悲惨な状態から救いたいと強く思うようになり、9月1日から自宅を開放し

て開校することにしました。」

ボーカスが目にした子守をしているこどもたちの姿は「小さな浮浪児」〔注11〕としての印象がかなり強かったようである。

「・・・しばらくの間は出席していた女兒も欠席するようになりましたが、1月1日からは女兒たちも時間通りに集まるようになり、ある赤ん坊は年を増すごとに女兒の側にじっと座ってられるようになりました。まるで、小さな学校のようにになりました」〔注12〕

それでは、具体的な学校の生活ぶりを見るとこうである。

「・・・この薄幸の子供たちを援助するための私たちの努力は限られた地域で行われ、八畳の部屋で一人の先生が指導するわけですがその指導の結果として得られるものは計り知れない達成感と満足感があります。年間を通して30人以上の子供たちがおりますが常時、出席できる子供たちの数を指導上20人に抑えたいと思っています。

子供たちは全員が歌うことが大好きです。歌っている間は子守の赤ん坊は静かにしています。絵に対しても大変興味があります。特に裁縫の時間は楽しみで、自分たちが身につける小物を上手くできたときには、とても喜んでいきます。読み書きのも向上の後がみられます。・・・」

ボーカスの悩みとしてはこのような学校をさらにこの町で拡大したいと思っているが、最大の問題は教師の確保であった。〔注13〕

添付した「子守学校」の「卒業證書」は明治二十八年九月付けとなっている。当時、塩分町に住んでいた本人は家業の都合で学校へは行くことができなかった境遇にあった。

存命中の子孫の方からの厚意で撮影を許され、今回掲載することができた。

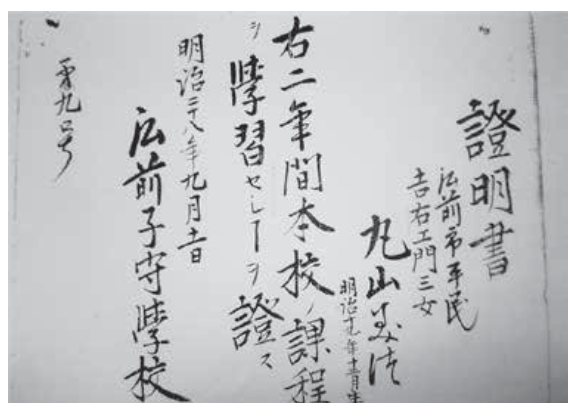


写真4 個人 蔵

おわりに

今回本稿で取り上げたテーマは「女性の視点から見た明治期の弘前」である。原書には随所に日本語をローマ字に書き換えて説明を加えている。

ニンドの女性らしい細やかな観察と異文化理解につとめようとしている姿が至る所に書かれている。

「学校訪問」ではボーカスは日本語にも精通していたらしくある学校で白神源次郎とラッパについて講演している。ジャーナリスト的な視点からも本国への報告書を間断なく書き送っている。

弘前での「子守学校」の開設にあたりボーカスには、よほど悲惨な子供たちに見えたようである。

指導者として前任校での教え子（聾啞者であった）を函館から呼び寄せ、子供たちの指導にあたらせた。次のように述べている。「このような学校には彼女のような誰にも負けない忍耐と思いやりのある人物がふさわしいのです」

またボーカスは「子守学校」のことを「救済学校」“Lift up school”と書いている。

『青森縣年報』（明治十八年八月二十五日）の「學齡兒童就學」（「日本帝国文部省年報」）には次のように報告されている。

「…不就學ノ就學ニ超過スル所以ノモノハ…特に女兒就學ノ鮮少ナル殆ト學齡十分ノ一ニ居ルカ如キ…」とあるように、女子の就学率が甚だ不振であることが書かれている。

当時は自家の子守や農作業の手伝い、あるいは年長になると口減らしの為に町の商家へ子守奉公

に出された。津軽地方ではいわゆる「アダコ」と呼ばれていた。家庭が貧困であることに加えて、「女子には教育は不要」という意識が強かったのである。明治期の子守をしながらでないと学校へ行けなかった女兒は日本のどの県においても見られた光影で、修業年限は1、2年程度であった。

普通学級の児童と同等の教育を受けられるようになるのはまだ先のことであった。

このような時代にボーカスが蒔いたほんの小さな種がやがて形を変えて弘前における幼児保育としての託児所の開設につながっていくことになる。

〔注〕

- 1) 『来日メソジスト宣教師事典』 1873—1993 ジャン・W・クランメル
- 2) "THE ROLL CALL" Board of Mission of the Methodist Library New York
- 3) Heathen Woman's Friend Hirosaki, Japan, Feb.24, 1894 Vol.XXXV MAY, 1894 NO.11 Georgiana Baucus 青山学院資料センター蔵
- 4) 穴を空けた板を作り、乾燥した豆の入った袋をその穴に投げ入れる競技。二人一組で行う。
- 5) Shirakami Genjiro <白神源次郎> (しらがみげんじろう 1869—1894) 日清戦争で戦死した兵士。ラッパ手として死してもラッパを離さなかった。明治35年～昭和20年まで小学校の修身教科書にも掲載された。その武勇は海外にも発信されたといわれている。
- 6) ニンドとボーカスは津軽の秋の風物詩である「登山ばやし」をほぼ完璧にローマ字に聞き写している。正式にはこうである。
「懺悔 懺悔 サンゲ サンゲ
六根 懺悔 ロッコンサンゲ
お山 八大 オヤマサハッダイ
金剛 道者 コンゴウドウサ
一々 礼拝 イチイチライハイ
南無婦命頂礼ナムキミョウチヨウライ」
『なつかしの弘前 庶民の歴史 明治編』
(東奥日報社)
- 7) 『青森県の写真事始 船水 清』 p102, 116, 117
- 8) 『青森県弘前市地明細絵図』（明治26年7月）には「元寺町 写真師 神 忍」の二階建ての写真館の絵図がある。
- 9) 『青森県の地名 日本歴史地名体系2』

10) 『ふるさとのあゆみ 弘前 I 山上笙介』には
 天守閣と下乗橋とあり、推定明治10年と記して
 いる。その年代だとすると西谷休之助が撮った
 ものと推定される。

11) Minutes of the Woman Conference of the M.E C
 No.2 1889~1897 AOMORI DISTRICT p40, 41, 42

“Having a strong desire to help such little waifs,
 I opened a school or class for them in my own
 home from the first of September.”

12) ibid p42

13) ibid p43